

編集後記：年度末に近づき、2020年度をふりかえってみました（2021年3月中旬にこの原稿を書いています）。今までの年と大きく変わったことは、やはり新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行による仕事環境の変化でしょうか。我々の業界・分野でも、テレワークが普及するとともに、オンライン会議の活用が主流になってきたと思います。

私自身の体験例ですが、北極評議会・北極圏監視評価プログラム作業部会関連の仕事で、欧米の数値モデル研究者と定期的にオンライン会議を行っています（通常は6週間に1回）。人数は10人程度のため、各自のビデオカメラをオンにして会議を行っています。自分だけがアジア、他のメンバーは欧米（北欧諸国、英国、米国、カナダなど）です。極東と北米西海岸のメンバーがいるため、北米西海岸は早朝、日本は深夜0時頃に会議を開始しています（自分だけ日付が異なることがあり、日程調整で日を間違えやすい）。1年間を通してみると、欧米ではロックダウンが実施された影響もあり、自分以外の全員が自宅で仕事をしていることがほとんどでした（夏季はビデオの背景が職場の人もいました）。日本と欧米で COVID-19 の影響が異な

ることを強く実感します。一方、オンライン会議の回数をかさねてくると、皆の自室の様子や趣味なども分かってくるので、なかなか興味深いです。

会合以外にも、オンライン（google drive など）で文書を作成する機会が増えました。オンラインなので Word の原稿上で、リアルタイムで他の人が文章を入力する様子が見えます。皆で評価報告書の執筆・改訂を行った時の体験では、同じ画面上で、自分が一文を書く間に、欧米の研究者がたくさんの文章を書くことを目のあたりにし、彼らの（締め切り直前の急ぎの）英文執筆スピードを実感したのが印象的でした。英文執筆の瞬発力を鍛えることは難しそうです。

オンラインは便利な面も多いですが、研究の推進には、やはり、学会などでの人との出会い、久しぶりに会った人との会話、対面での活発な議論などが非常に重要だと思います。世の中が落ち着き、学会が現地で通常開催されることを切望しています（欲を言えば、現地とオンラインの同時併用開催ができると理想でしょうか）。今後も、気象学会や「天気」を皆様の研究交流の場として活用していただけると幸いです。

（大島 長）